

解 説

今 崎 暁 巳

最初に、この集に収められるルポルタージュ作品群の特徴について触れておきたい。

まず、ルポルタージュ・記事に近い報告をとわず、ほとんど、短い作品が多いということをいわなければならぬ。一九三二年二月号の『改造』に掲載された徳永直の、東京市電争議が行われる中での労働者市民の消費組合づくりを描いた「輻重隊よ前へ！」の一〇七枚を除くと、ほとんど、原稿用紙数枚から五十枚ほどの現場報告作品である。

さらに、それぞれの事件、状況の特徴によって、関東大震災、労働問題、農・漁村問題、選挙戦・白色テロのたかいたという四つのテーマ別に分類したうえで、全体が編年別に構成されていることにも、一九二〇年代末から一九三五年ころまでの、僅か数年の暴圧の時代を刻み、記録したこの時期の特徴がにじみでている。

雑誌に掲載された短い現場報告・経過報告が多い点も、関東大震災時の人民弾圧から始まり、つぎつぎにひき起こされた社会的事件の量質を考えると、その必然性が理解できるし、一年とかそれ以上の年月をかけ、取材執筆できた「女工哀史」「狼へ！」の大作を生んだ、一九二〇年代前半までの時代状況との違いを、見ることができる。

四つのテーマに構成されている点については、まず、最初を関東大震災と三・一五事件の弾圧報告から始め、

最後を、山本宣治、小林多喜二の虐殺に代表される白色テロの現場報告でしめくくる、起結の構成がとられたことの中に、その苦心が表現されているといつていい。そして、それは、一九一〇年代後半に始まった、労働者農民の生活現実を描き報告する、日本のルポルタージュ、報告文学が、『三・一五事件、治安維持法改悪、ナップ結成』に象徴される、狂暴な弾圧支配、天皇制下のファシズム体制強化への移行状況の中で、人民のたたかいを伝え報告する必要に応じた表現方法に迅速に適応変化させていったことでもある。

第一次大戦後の経済恐慌と労働者、農民のたたかいの高揚の中で、一九二〇年に日本初のメーデーが実現し、一九二二年に日本共産党が創立された黎明の時代状況の中で誕生した、労働者、農民のたたかうルポルタージュ。その最初の輝きを持続させ、発展させようとする眼の前で起こった一九二八年二月、第一回普通選挙における日本共産党の前進を恐れる天皇制政府の三・一五大弾圧。そして、一九二九年に起こった世界経済恐慌の打撃を労働者農民に転化し、中国東北部への侵略戦争を開始する中で、治安維持法体制の下、集会における「弁士中止」、文章における「伏字」、さらに投獄・拷問という、思想表現の自由並びに生存の自由を奪う社会的極限状況そのものが、この巻に収めることのできた、たたかいを描くルポルタージュ作品群の世界を生む社会的条件であったということが出来る。

私たちは、日本の労働者農民の生活、たたかいを描くルポルタージュ、記録文学の誕生、高揚が、この時代状況そのものと、その困難の中で、真に労働者農民の立場に立つ文学組織、ナップを誕生させた優れた作家たちのプロレタリア・レアリズムへの真摯な努力の中から生まれた歴史的事実を確認することが重要である。言い換えれば、青野季吉が、「現実を意力的に、尋求的に『調べて』行く行き方、それから来た思想なりが、いまの文壇を救ふ一つの大きな道」と、現実やたたかいに背を向ける文壇のあり方を批判した方向で、初めて、労働者農民解放への運動とともに現実を迫る階級的文学運動によって、事実を事実としてとらえる表現方法が日本において切り拓かれたということになるのだ。「第一に、プロレタリア前衛の『眼をもつて』世界をみることに、第二に、厳正なるレアリストの態度をもつてそれを描くこと」(蔵原惟人「プロレタリア・レアリズムへの道」)

前巻の一九一〇年代終り、労働組合設立運動、小作争議が起り広がる時期に触れたように、明治期、日本資本主

義の創成期に、ヨーロッパ近代と異り、封建制強く民主化の遅れた日本の状況を考える時、社会的事実としてとらえ描く、日本のルポルタージュ、記録文学の世界が、このように、厳しい弾圧支配に屈せず、侵略戦争に反対し、労働者農民解放の旗をかかげた階級闘争、階級の文学運動とともに育った必然性が理解できる。

二

まず、最初を、大正末年とか、大正デモクラシーの時代といった編年の特徴でとらえるのではなく、関東大震災という、大きな自然災害を引き金として、支配権力によって意図的に組織された性格をもつ社会的事件について書かれた作品群でまとめたこと自体、いかに、この事件の周辺でおこった状況が人々に大きな衝撃を与え、暗い人民弾圧時代への幕明けの意味をもったかを示しているように思う。

この人民弾圧時代の幕明けとして、人々に大きな衝撃を与えたことの証しは、とりあげた作品の中で、事件直後に書かれたのは「種蒔き雑記」だけで、後の作品は、五年後、日本共産党弾圧の決定的な事件となった、三・一五事件が吹き荒れる中で、両事件の関連性を考えて執筆され発表された事実によって示されている。柳瀬正夢の「狂犬に噛まれる」では、両事件で官憲弾圧の体験をした立場から、怒りをこめ、思いをこめ、鋭く激しく、官憲への告発がなされている。

私たちは、今、ふり返って、日本における資本主義体制が、天皇制政治で国民を縛り、帝国主義国家へと変貌していく最初ののろしが、「大逆事件」であり、さらに、労働組合運動、日本共産党の誕生、高揚の中で、関東大震災の混乱に乗じた、朝鮮人・社会主義者の虐殺へとエスカレートした歴史の事実を確認することができる。だが、当時生まれたばかりのラジオ、検閲統制が進んだ新聞雑誌などマスコミの状況の中で、国民は日常的にひき起こされる社会的事件の性格・意味を自分たちにひき寄せ考え行動する道を急速に閉ざされ、三・一五事件による共産党の大量検挙、間もなく、労働党代議士山本宣治一人の反対の中で帝国議会を通過した改悪治安維持法のもとで、いっそう完全に思

想表現の自由を封殺されることになっていったのだ。

従ってここに掲載した、関東大震災後の状況と三・一五事件の状況をつなぎ、語るルポルタージュは当時、一年一年、大変なテンポで、上から天皇制政府官憲により準備され、進められた狂暴な弾圧政治の真相を知ることのできる貴重かつ重要な時代の証言ということなのだ。

まず、関東大震災の異常事態を体験し、その事実が支配的マスコミによって伝えられず、歴史の闇に葬り去られることを憂える多くの人々が力を合わせ、自力で「種蒔き雑記」（亀戸の殉難者を哀悼するために）を世に出したことが、たまたまいが生み育てるルポルタージュの役割を示したといっている。

この文集は、労働総同盟が行なった亀戸労働者事件調査集から、抜粋し、平沢計七、川合義虎など、主として南葛労働組合に所属していた労働者が亀戸署に検挙され、虐殺された真相を明らかにするための証言を集めて、作られている。証言者の供述を聴きとり、文章にまとめた人たちの名前には、布施辰治、黒田寿夫、山崎今朝弥、三輪寿壮など、当時の労働事件、無産者運動のために働いた弁護士たちの名前も刻まれている。

虐殺された吉村光治（24）の兄が、亀戸署長を追及した時の会話を引用しよう。

「私はこのことを話して処置の不当を署長に向ってなじった。

「殺したのは私の責任です。巡査にそう言わせたのも私の命令です。」と署長は泣かんばかりに詫言じた。

「骨を何うしてくれる。」と私は言った。

「骨は荒川放水路の四ツ木橋の少し下流で焼いたから自由にひろって下さい。」

「あそこには機関銃が据付けてあって朝鮮人が数百人殺されたことは周知のことだから誰の骨かわかるものですか。」

こんな会話が当事者家族と官憲の間で、遺体ひきとりの一コマとして、白昼、警察署の一室でとり交わされ、その事実を裁判所も新聞もとりあげなかった当時の日本——あらためて、この雑記が発行され、『戦旗』に掲載された三つの作品とともに、真実を我々に語ってくれることの大きさを考える。

詩人壺井繁治が、一九二八年（昭和三年）九月号の『戦旗』に震災追想記として書いた「十五円五十銭」は体験を短編小説風にまとめた作品だが、関東大震災下の民衆弾圧の主要目標とされた朝鮮人が、ただ朝鮮人であるというだけでひき出され、検挙され、時には自警団の男たちに撲殺され、時には武装軍人に射殺されることになった。その異常な東京の現実が極めて具体的に浮かびあがってくる。満員列車で、着剣の兵士にきかれ、「ジユウゴエンゴジツセ」と正確に濁音を発音できなかつたら逮捕される異常がまかり通る東京の町——朝鮮人と社会主義者が暴動をおこし、火をつけるという流言が関東を中心に各地に広がり、朝鮮人だけで、吉野作造の朝鮮羅災同胞慰問班の調査によれば、死者二六一三人に達し、中国大使館調べによると、中国人行方不明者も百六、七十名に上ったという事実——これも、「十五円五十銭」の踏み絵尋問の中で、朝鮮人と同じように濁音が発音できなかった在留中国人被害者だったということ。

越中谷利一の「戒嚴令と兵卒」も、同じ震災追想記として『戦旗』に掲載された作品だが、「朝鮮人の不穏な動き」を理由に出された戒嚴令の実態を、軍隊の内側から描いている。流言によって、自警団など市民の中に、パニック状態がつくり出されただけでなく、軍隊内部にも、見えざる敵に、武装着剣し、真刀をもって眼尻を決して出陣するようになる模様がよくわかる。市民生活の中でも、軍隊の一般兵士の中でも、上意下達の間関係しかない場合、上から、不安を背景に、虚偽の敵情報が流されれば、後は自然に、自発的に戦闘、虐殺行動に進み、社会的パニック状態がつくり出される恐ろしさが、身にしみる。

優れた風刺画家、柳瀬正夢の「狂犬に噛まれる」は、日本共産党の全国的弾圧、三・一五事件を体験した後、同年の『戦旗』十月号と十一月号に、体験記として続載された作品である。内容の特徴として、柳瀬正夢自身が、関東大震災の戒嚴令下、当時の社会運動指導者大山郁夫宅の捜索で体験した事実と、三・一五事件後、北九州の無産者新聞支局を訪ねた時の体験をつなぎ、軍隊や特高、一般警察がどんな風に共産党員芸術家を遇したかを、思いをこめ、怒りをこめ書きつづっている点をあげることができる。歯切れよく、タツチ鋭く、権力者の狂暴さをえぐり、労働者農民のたたかいを描きつづける柳瀬正夢の人間性が、言葉の端々から吹きだし、作家のルポルタージュとも異なる、個性

豊かな作品となっている。

三

労働問題にかかわる作品全体を通してみて気づくことは、前巻でとりあげた、一九一〇年代から二〇年代前半にかけての、すでにさまざまな抑圧、弾圧の傾向が存在していたとはいえず、初めて日本に労働者の団結権、争議権が労働者自身のたたかひによって、かちとられ始めた黎明朝の作品傾向との形式・内容両面での違いである。

この形式では短い現場報告、内容ではたたかひの記録というルポルタージュ作品の特徴をみる時、前巻で「女工哀史」「狼へ!」「製糸女工虐待史」という、労働者の状態にかかわる大作中心にまとめた作品活動の面との違いに気づくとともに、労働運動そして労働者の生活が急激に変化していった事実を見ないわけにいかない。

労働者の組織活動についていうなら、三・一五の日本共産党弾圧にひきつづき、四月に行われた、労働党、無産青年同盟、労働組合評議会の三団体を解散させたことに代表されるように、一年一年大衆的活動の場を奪われ、侵略戦争への思想動員を強めつつ、暗く自由のない職場地域の状況が作り出されていったことは間違いない。従って、いくつかの民間大企業経営における労働者の目覚めから大争議へと発展していく高揚が、極めて乱暴に、労働者の人権、生存権すら脅かす暴力的方法によって、抑えこまれていくことも事実だが、同時に、私たちは、一家離散、生活崩壊の危機をともしないつつ、そのたたかひをささえ、持続させていく労働者階級が確かに生まれ育っていく鼓動を、報告のしほしに読みとることができの事も事実なのだ。

さまざまな労働現場で労働者、家族が目覚めたたたかひ始める状況をみる中で共通する一つの大きな特徴をあげると、賃金や首切りに対するたたかひとともに、職場の人権を主張し、虐待とたたかうことであつたり、託児所づくりや消費組合づくりであつたりという風に、職場家庭地域をつなぎ人間らしく働き生きるたたかひとして、人々を新しく連帯団結させている点である。人間の生命を守る医療や、子どもたちを育てる保育の職場にかかわるたたかひは後での

べるけれど、それ以外にも、「女人芸術」が意欲的に出版業界の暗部をえぐった「反動希望社一覽」など、「文芸戦線」が掲載した、「蟹工船」を連想させる、北海漁業労働者の奴隷的労働現場を描いた「エトロフ丸漁雑夫虐殺事件」といった作品群には、出版資本、漁業資本などもつ、前近代性、反動性がえぐり出されている。

この、日本の資本家がつ、前近代性・反動性は、「女工哀史」などで、極めて具体的にえぐり出されたように、資本家自身がヨーロッパのブルジョアジーほどに、ブルジョア民主主義の価値観を体験せず、後にふれる地主階級のもつ封建的価値観とも重なりあつて、労働者の人権はもちろん、生活権生存権まで奪うほど非人間的な支配管理を行なつていたことが浮かびあがつてくる。

まず、戦前労働運動史に残る民間大企業における争議報告について触れよう。

誕生して間もない日本の労働組合運動が、労働総同盟の分裂、たたかう評議会設立へと進む苦悩の中で、一九二五年の共同印刷争議、一九二六年の浜松日本楽器争議と、大企業における労働者の争議体験をつみ重ね、一九二七年以後もたたかひの灯を燃やしつづける。

ここにとりあげた、平林たい子の「日本最初の製糸大争議」は一九二七年、岡谷の製糸大企業、山一林組に誕生した総同盟傘下全日本製糸労働組合二三〇〇人の女子労働者による日本最初の争議の報告であり、江口換の「野田へ行く」も、同じ年、千葉県野田町にある総同盟傘下の野田醤油労働組合に所属する一三五八人による長期ストライキ終結後の労働者の生活を描いた作品である。

いずれも、会社、警察、保守勢力、総ぐるみの弾圧によって、敗北するけれど、これまで、労働者の権利も自由も全くなかった、製糸、醸造産業の職場に、労働組合が誕生し、日本の地域社会に働く者の存在と権利を知らせ、暴力団、警察まで使つて労働者の団結を圧殺する資本家の姿を社会的に浮かびあがらせた役割は小さくなかった。とりわけ、岡谷の製糸女工、日本最初の十九日間にわたるストライキが生まれるには、前編に収めた、細井和喜蔵の「女工哀史」、それに触発されて書かれた、まさに信州製糸女工の実態をえぐつた、佐倉啄二「製糸女工虐待史」、この二つの紡績労働界の実態をえぐつた記録文学作品が社会的に果たした役割が大きかった。

岡谷では、会社が食堂を閉鎖し、住民が風呂も使わせない圧力の中で十九日間たたかいつづけ、野田では、赤尾敏の建国会まで動員される中で、二一九日に及ぶ、長期争議を可能にした。「信濃毎日新聞」は、「労働争議の教訓」と題する社説の中で、こう書いた。

「……山一林組の女工たちは、製糸家と悪戦苦闘の後、ひとまず敗れた。とはいえ、人間への道はなお燦然たる光を失わないかぎり、歴史がその足をとめないかぎり、そして人間生活への道が、その燦然たる光を失わないかぎり、退いた女工たちは、永久に眠ることをしないでらう」

この当時の良心的地方紙の主張にもにじみ出ている、人権、労働権に目覚め、資本とたたかうことを始めた紡績女子労働者への共感の中に、たたかひの敗北をこえ、持続し発展する労働者階級の可能性と未来をみる。

その団結と連帯の絆を広げる息吹きは、各地各職場バラバラに見える報告を貫いて感じる事ができる。それは、当時、生まれたばかりの労働組合運動の状況を考える時、宮本百合子「電車の見えない電車通り」などいくつかの報告に見られる、労働者の日常生活の中に連帯・団結の絆を広げ、資本主義の土壌の中に労働者の生活圏、世界を築いていくことへの萌芽といえるのだ。

例えば、東京の至誠病院、京都の京都帝大病院における看護婦が人の生命にかかわる仕事に従事する労働者としての権利に目覚め、起ちあがる姿を描いた零不二子の報告は、東京各地の労働者の子育て運動を描いた、住野茂子「托児所探訪記」とともに、女性中心の労働現場でのより日常的な団結の絆の前進を反映している。女子労働者の団結という点と合わせて、労働の質が、医療、育児という、人間そのものの生活にかかわる点が、より深く生活に根ざした階級的な労働運動が育つ、大切な条件を示唆しているように思う。その萌芽が戦後に育ち、今、医療、保育、教育の分野における労働運動が、より健全な労働運動の伝統を引き継ぎ、発展させている事実を見ることができ。また、徳永直の「輻重隊よ前へ！」と江口渙の「野田へ行く」に書かれている、片や、野田醬油争議、片や、東京市電争議という大争議を支え、労働者農民の産直連帯の始まりもみられる、消費組合運動の広がり、現在、一九八〇年代の二二〇万世帯をこえる生活協同組合運動の発展と重ね合わせると、日本の労働運動、協同組合運動、子育て運

動、文化運動、社会福祉運動など、労働現場、地域生活をつないで発展する、民主主義運動、社会変革運動の多様なひろがり、すでに示しているように思う。

労働者、家族の生活ルポルタージュという点で、江口渙の「野田へ行く」と、松田解子が一瞬にして「一千の生霊を呑んだ」といわれる三菱尾去沢鉱山事件を描いた、『婦人公論』『日本評論』二誌に掲載した作品の特徴に触れておく。「野田へ行く」「一千の生霊を呑む死の硫化泥を行く」には、固有名詞をもつ労働者が人間として描かれ、家庭、地域の生活が描かれ、書く人間としての江口、松田両氏の存在が、現実の事件、人間とかかわってルポルタージュの個性、小説にはない魅力をつくっている。事件の経過報告を主要な任務とした報告文学の中で、たたかひの経過とともに人間を描くルポルタージュの可能性が切り拓かれてきたことを示している。その人間を描く点で、百枚をこして、当時の東京における消費組合運動の広がりを具体的に、表・数字を使って、資料的性格でまとめた、徳永直の「輻重隊よ前へ」と比べる時、その違いがわかる。徳永作品は当時の東京における労働者の消費組合運動の実情をよく伝える一方で、一〇〇枚以上を使い会話を多く駆使し、状況描写をわかりやすくしている割には、生きた人間としては一人も浮かびあがってこない。江口の「敵の一人のコメカミにあたって眼球を眼窩の中から見事に飛出させて終った」浦吉君やおかみさん、松田の硫化泥現場で再会した、名前も忘れた小学校時代の同級の男といった人物描写の中に作者とのかかわり抜きには描けない強烈な、ルポルタージュ作品における人間存在を見ることができ、現実に生き、働いている人間の個性・息づかいをとらえ、表現することの大切さは、ルポルタージュ・フィクションをつらぬくりアリズムの基本なのだとということ。

四

農・漁村問題の作品を通してまずいわなければならぬことは、日本における天皇制政府と帝国主義的侵略を支えた資本家たちが、彼等のいう、物質的的人的資源を作りだす、最も大きな草刈場を、都市労働者とともに、農村農

民においていた点であり、同時に、先進資本主義国には例をみない、土地を与えず、五割をこえる過酷な小作料で農民を縛りつける地主小作制度によって、絶対主義的天皇制下の封建的支配、搾取を一九四五年、敗戦の日までつづけてきた事実である。

従って、世界恐慌の吹き荒れた、一九三〇年春、「戦旗」に連載された、世田良平の『農村の姿』シリーズに典型的に出ているように、不況と水害が重なり、小作米を納めれば餓死する農民の自殺といった実例が各地農村に続発し、全国各県で、耐えられず、農民組合を作り、小作人組合をつくり、地主に小作料減免を嘆願し、小作争議にまで進む状況が起こっていたのである。

もちろん、目にあまる農村農民の生活できない惨状については、一般紙誌も報道したけれど、それはあくまで、数量的被害報告の域を出ず、もしくは、悲しい現実への哀れみをかうといった種類のもので、農民自身の怒りや争議行動が報道される場合はほとんどなかったといっている。だが、実際は「餓死か？ 闘争か？」、「法廷戦から大衆の威力へ！」という世田報告のタイトルに見られるように、新潟・秋田など、東北、北海道中心に、新聞、ラジオ報道ではほとんど伝えられることのない、数多くの小作争議が激発していた事実を、ここに掲載されたルポルタージュ作品から読みとっていただきたい。

「女工哀史」は、比較的多くの人々に読まれるようになってきているが、都市でも農村でも、労働や生活の状態に耐えられず、自らの団結連帯の力で、地域生活の現場で人間らしくたたかいたつづけた先輩たちが決して少くなかった誇るべき歴史的事実を、私たちはもつと、現代に語りつぐ必要を思う。ヒロシマ・ナガサキ・オキナワと、帝国主義戦争が国民を犠牲にした戦争の事実を語り継ぐとともに、山本宣治、小林多喜二の虐殺、無数の労働者農民学生が生命をかけた生活をかけたたかい抜いた事実を現代につながる先人の努力生きざまとして語ることが極めて重要である。

その意味で、ここに掲載されている農民の生活にかかわる状況報告、たたかひの記録は恐らく、他に見ることのできない、リアルな第二次大戦前夜の日本農村農民の実態を伝える語り部の役割を果たしてくるに違いない。とりわけ、一九二八年、三・一五直後に結成された、たたかう作家芸術家組織ナツプに所属し、たたかひ抜いた作家たちを

軸に、「戦旗」「文芸戦線」「改造」「文学新聞」などに発表され、一九四五年まで陽の目を見ることのなかった作品群を、今あらためて熟読することによって、すでに、真実が埋もれ、伝わりにくくなっていた人々が支配者・権力によって戦争にひきずりこまれた時代の人間の息吹きが甦り、伝わってくるのだ。

高知漁民の蜂起をはじめ、激発したたかひの報告から見ていこう。

激発した闘争という点で、岐阜、犀川切落しをめぐる安八郡農民の地域、農業を守るたかひは立野信之、新潟県木崎村の小作争議の中で生まれた農民学校の生活は鹿地亘、それぞれに性格は異なるが、農民のぎりぎりの生活要求から生まれた地域に根をはるたかひである特徴は共通している。木曾川治水にかかわる農民と支配者の抗争の歴史は根深く、立野がスケール大きく提示する安八農民の積年の思いが伝わるだけに、後、激発した闘争現場描写に終っている点が物足りなさを覚える。鹿地が描いた、木崎村の小作農民の子どもたちを集めてつづけられる農民学校のいきいきとした様子は、暗さと悲惨さが強調されている一九三〇年前後の日本農村に息づいていた農民の生活力溢れる行動性、連帯性を伝えてくれる。

労働者の保育、医療、消費協同などの日常生活の連帯描写にも出ていたように、農民も目覚め、連帯し、地域生活を自らの責任でつくり始めた日常には、暗さをつきぬける農民の楽天性合理性すら見出すことができるのだ。たたかう労働者、農民が弾圧支配に屈することなく獄中に、日常生活に創り育てていた世界こそ、「戦旗」を先頭にたたかうルポルタージュ・小説によってのみ書き残されていることがわかる。

農村が前近代的小作制度を残したままの資本主義化の大きな犠牲を受け、飢餓や身売りが、とりわけ、東北関東各地に出ている状況についての報告は、最も数多く、紡績女工、娼婦への道に繋がり、日本の中国侵略の口実とされた貧しくつらい生活状況の重みが全体として伝わってくる。ただ一つ、気づくことは限られた日数での印象報告が多い理由もあって、農民の生活の暗さも深くとらえるリアリズムが不足している傾向のある点である。そうなる理由の一つとして、作者自身が二七年テーゼが明確にした封建的地主小作制度とたたかう農民の主体形成の立場に立っているかどうかがあるように思う。貧困の現場報告をこえ、農民の主体的な連帯への努力、たたかう生活、人間の

表情に踏みこんでいる作品との違いともいえる。

その点で、鹿地亘と宮本百合子の仕事、姿勢の積極性が目につくけれど、貧困の中の生活描写、人間描写が踏みこんで丁寧に行われている意味で、二つの作品をとりあげる。

一つは、群馬県下の六つの地域を八日間かけて、一つ一つの村の生産の特徴をとらえながら、生産の仕組み、市場流通、価格の実態をきっちりおさえ、どこに、農民の思いと行動があるかをリアルに書いた里村欣三の「暗澹たる農村を歩く」である。そこで、生産流通を結び、農民の生活の厳しさが描かれる中で、なお、人の不幸を心配する人情のやさしさ、明るさが表現されている点がいい。取材者里村を失業者と思いこみ、就職斡旋をしてくれる百姓や人情こまやかな木賃宿のおかみなど、恐慌の嵐吹きすさぶ暮らしの中の働く者の連帯の視点を読みとることが出来る。同時に、こんな風に庶民生活の中にあつた、やさしい友情や連帯の世界が、天皇への忠誠とアジア侵略への体制づくりにのみこまれ、作者里村もまた戦争協力者の道に進んでいく、治安維持法、侵略戦争体制確立の一九三〇年代の凄まじさを考えざるをえない。

もう一つは、高橋辰二の「貧困児童——或る農村教員の日記」。ある教師が担任する三年生の弁当ももってこられない子どもたちとの生活を、日記の形で書いた報告文学である。

学級と職員会と校長、貧困家庭の「できない子たち」の取り扱いを軸に、体験にそくして、内側から学校生活の日常を描いているから、現代の学校教育のもつ非人間性ともつなげながら、自由と民主主義のない時代の経済的貧困と合わせて、人間的貧困・荒廃を実感することができる。

そして、小品であるが、宮本百合子の「飛行機の下村」には、弾圧と貧困の時代状況の中でも、軍用地の周辺にある開拓部落で、十七戸の農民たちが団結して、封建地主とたたかいつづけている生活の日常が気負わずに描かれている。そして、「文学新聞」のための僅か七枚の文章の中で、場所も人間も特定させないための××伏字にされた四人ほどの人の個性がきっちり描かれていることもいわなければならぬ。その一人、四・一六で、婆さまもろともぶちこまれ、六十日ブタ箱で過した老人が一言もしゃべらず、ただ一つだけ、看守に向つていい、とつた行動のおかし

さ。「看守が来ると、おーい、年とつて目が見えんからお前見とくろつちや、毎日虱とつとった」

大切なことは、どのような弾圧体制の中でも、帝国主義的封建的農民支配の本質を見ぬき、確信をもってたたかう連帯の中に暗黒時代の農民の幸福があるということ。

労働者のルポでもそうであったように、事件を正確に迅速に描く迫真力と合わせて、優れたルポルタージュ・ノンフィクションのあり方として、人間を描き、生活をリアルにとらえる作品のあり方が、農村描写にもあらわれていたといえるように思う。

五

関東大震災の弾圧で始まり、選挙戦・白色テロとのたたかいという項目で締めくくる、このルポルタージュ集の他に見ることのできない特色——それは、僅か十数年極めて短かい間に労働運動革命運動の黎明期をへて、一切の自由を圧殺する天皇制帝国主義日本の支配に対する人民のたたかいがつくりだしたものの。

作家江口渙が、明らかに、右翼テロリストと警察自身の手で虐殺された、山本宣治と小林多喜二のその瞬間をとらえ、人々に伝えようとした二つの現場報告がその象徴的仕事といえるけれど、その他の侵略戦争初期の生活を伝える作品も、それぞれに、当時の政治と支配の異常、非人間性を一つ一つ実証してくれている。

当時の自由圧殺、思想弾圧の極点にある、日本軍隊内部に常設された思想委員会の証拠物件を目にした一兵士が、兵営内部からプロレタリア作家同盟の編集部に送り届け、「文学新聞」に掲載された「連隊思想委員室」——戦後になって、陸海軍各部隊の中に組織された反戦兵士グループの存在が明らかにされたけれど、ペンネーム水尚によって報告されたこの作品は、当時、常時監視弾圧の状況におかれながら、いきいきと生活し、敏捷に、権力者の監視の眼をくぐって行動していた若い兵士たちの日常を浮かびあがらせてくれる。また、黒島伝治の「奉天市街を歩く」は、中国東北部侵略、満州建国を進める人間とみない血なまぐさい支配の日常を、鋭くえぐっているし、「上海

出征日記」は、さらに中国全土侵略への一歩だった上海事変に初めて出征した青年の眼を通して、略奪し、強姦する日本軍隊の実態に対する不信と怒りが率直に語られる。いずれも、まだ、帝国主義侵略の初期の報告なのだが、すでに、軍隊内部の天皇を軸とする弾圧支配の仕組みも、「支那人」と見れば「ケツの孔まで検査し」、平然とつき殺した関東軍の実態も、まともに、人間らしく生きてきた日本人青年たちの眼に、そのあまりの残虐性異常性がはつきり映っていたのだ。

侵略戦争に反対し、平和をと、行動する社会主義者には、選挙活動も弾圧された時代——一九二八年二月の帝国議会の議員選挙における、北海道の山本懸蔵、長野の藤森成吉、二人の選挙報告は、それぞれに、ギリギリまで自由と民主主義を奪われる中で、なお、生活の中に、民衆とともに、行動し努力をつづける共産党員である政治家、芸術家の人生を賭ける真摯な人間性を伝えてくれる。しばらく前、一年をかけ労働者の現場を体験し、「狼へ！（わが労働）」を書いた作家藤森成吉が、全国に吹き荒れるファッショ化の嵐の中で、故郷南信の人々の希望にこたえ、立候補し民衆とともに政治活動に参加する姿は、侵略戦争と専制政治に対して立ちむかう作家の生命をかけた選択をみる。しかも、三・一五事件を経た、一九二九年の市町村会議員選挙には、藤森の故郷、上諏訪で、無産階級解放をかかげる候補者を応援する町民が全員検束される状況になり、東京では唯一の治安維持法に反対する労働農民党代議士山本宣治が右翼の手で殺される事件が起こる。そして、四年後の一九三二年十二月には官憲の手で虐殺された共産党中央委員岩田義道の労働葬への市民の参加そのものが官憲によって弾圧される事態となり、翌年二月、作家小林多喜二も警視庁特高の拷問によって殺され、惨殺体を送り届けられることになった。

さらに、二年後の一九三五年、壺井繁治の市ヶ谷刑務所における蔵原惟人との面会報告記によれば、市ヶ谷だけで、約三百人が拘留されており、新聞報道によると、延人員が全国で二万数千人になっていると書かれているのだ。

このルポルタージュ集が一九三五年三月号の「文学評論」掲載作品をもって終っている事実を、私たちは、冷厳な歴史的経過の中でとらえなければならぬ。

それは、たたかう労働組合組織全協が一九三五年には、激しい弾圧攻撃の中で、事実上組織活動不能の状態となり、

日本共産党も、中央委員が全員検挙投獄され、機関紙「赤旗」もこの年二月二十日付第百八十七号で停刊となり、日本各地の地域職場で侵略戦争に反対し、労働者農民の権利を守る全国的なたたかいかいがほとんどできなくなった社会状況の結果であるといっている。日本の自由と民主主義の封殺とともに、芽生え育ち始めた、革命的民主主義的な立場からの日本のルポルターージュ、報告文学の作品活動も事実上、一九四五年八月の日本帝国主義敗北の日まで、停止せざるをえないことになったのだ。

この、日本における自由と民主主義の圧殺を具体的に示した、警察、右翼による二つの虐殺事件の事実究明を、関係者からのききとり、犯人の供述、自らの取材と、当時の状況で可能な限りの事実の検証、収集の中で行なった、江口渙の二つの作品に、私たちは、深まるファッショ化の現実を文章でとらえたギリギリのルポルターージュ活動をみる。江口渙は二つの事件とも、事実を知るとともに、間髪を入れず、官憲による最も優れた民主主義者、革命家虐殺の真相をとらえ、一刻も早く人々に伝える報告文学の仕事を、短時日にやり切った。限られた時間、条件の中で、できる限り、現場の状況に迫るとともに、被害者を支え、ともにたたかひ、生きる仲間、家族、同居者たちの行動、思いをとらえ、つなぎ、構成した工夫努力をそこに見ることができる。

山本宣治の「真相記」は、その後書きに紹介しているように、直後に駆けつけた、上村進弁護士や労働者浅原健三、医師馬島圃、さらに、旅館の人々一人ひとりから生きた証言をひきだし、自分の体験と結んで、会話を駆使した現在進行形の文章表現をとっている。これはジョン・リード「世界をゆるがした十日間」などでとられた、体験に、聞きとりも資料も立体的に駆使した、ルポルターージュの方法の芽生えがすでに見られるといっている。少なくとも、素朴な体験報告記ではなく、人間ぬきき事件経過報告ではないのだ。

殺人現場が、警察の壁の中という、多喜二の死の真相報告は、送り届けられた、遺体に残された暴虐の爪跡を眼にする作家同盟などの仲間、そして、生きている息子に語りかけるようなお母さんなど、まさに、天皇制のテロ現場に立ちあう人間群像の息づかいを通して表現する手法がとられた。

二つの虐殺事件の状況に応じて、臨機応変にとられた、現実表現、人間表現の違った方法を、私たちはこの二つの

作品に見ることができ。

私たちは、日本帝國主義の敗北と絶対主義的天皇制の崩壊、人民闘争の広がりをつうじて一応の民主主義をかちとつてきた現在、表現の自由、生存の自由が抹殺される時代状況の中で、作家江口渙が、暴虐の事件、事実の中に不滅の人間存在を鋭く描き残そうとした工夫、努力を通して、ルポルタージュ方法の豊かな可能性とその萌芽を指摘できるのだ。

そして、これ以後、多くの作家たちが、従軍記者や文学報国会員として、戦争讚美、侵略美化の御用ルポルタージュ、エッセイを書く形で自らの人間性を売らざるをえなかつた歴史的事実を思い起こす時、一九三五年をもつて、時代と人間の真実に迫るルポルタージュ、ノンフィクションの仕事が発表不能になつた悲劇の意味を、もう一度とらえ直すことが、私たちに必要になつている。当時の弾圧、閉鎖状況の中、一九二〇年代なかばから一九三〇年代なかばまでの極めて短かかつたが、意気高らかに、事実を事実としてとらえ描く表現のあり方に、鋭く迫つた先人たちの成果を、今、あらゆる意味で、全面的に豊かに開花させる可能性が、現実のたたかひの面でも、その現実を表現する面でも、大きく広がっている事実を確認して。